



楽しく学べる防災教室「防災てらこや」 ～地域と育む防災の担い手～

神奈川県横浜市 横浜橋通商店街 株式会社 野毛印刷社 横浜市南消防署

1 団体概要

「防災てらこや」は令和4年6月に開始した行政、地域、民間企業の3者による協働事業です。事業の主体は、90年以上の歴史があり、連日賑わいを見せている「横浜橋通商店街」、地元・横浜で印刷とその周辺技術を磨いてきた「株式会社 野毛印刷社」、日頃から迅速な災害活動や防火・防災に関する事業を推進している「横浜市南消防署」で、「子どもたちが楽しく防災について学べるコミュニティ」の構築に取り組んでいます。

2 背景（経緯）

横浜市南区は、人口19万8,121人 面積12.65km²（令和5年4月1日時点）で、住宅地を中心とした古き良き温かみが残るエリアである一方で、木造住宅密集地域や埋立地、崖地等が多く、災害リスクが高くなっています。また、外国人住民登録人口が多く、国際色豊かな地勢から、管轄する南消防団に外国籍をもつ団員が多く在籍し、防災の取組の裾野を広げてきました。

横浜三大商店街の一つである横浜橋通商店街は、地域住民の生活の拠り所として空き店舗の利活用による活性化を進めていました。また、株式会社 野毛印刷社は、防災絵本の発刊をきっかけに地域貢献の方策を検討していました。

こうした状況の中、防災、多文化共生及び地域活性化といったそれぞれの課題の解決に向け、3団体の協働による防災まちづくり事業の創設に至りました。

3 取組内容

初めに、商店街の空き店舗等を活用し、防災絵本を近隣の保育園児に読み聞かせる企画から始めました。



空き店舗における園児に対する絵本の読み聞かせ

次に、夏休み期間には小学生を対象に液化実験やランドセル用防災セットづくりなど自由研究につながるイベントを開催して、より実践的な内容に取り組みました。



空き店舗における夏休み期間の防災まちがい探し

また、多文化共生では、外国籍児童が多い小学校を対象にした多言語対応の消防署見学や、商店街の街頭で行う熱中症予防キャンペーンで外国籍消防団員や多文化共生ラウンジと連携して多言語アナウンスを行うなど、取組を推進しました。

夏休みイベントをきっかけに、小学校からは総合学習で出前授業の要望が寄せられました。避難所の運営や災害時のコミュニケーション、トイレなど発災時のリアルな問題を、オリジナルの教材を開発して実験や実技など工夫を凝らして説明することで、子どもたち自らで課題設定をして、解決まで導く授業を展開してきました。



小学校における出前授業の様子

今年度は、昨年度「防災てらこや」を体験した学年と引き続き学習を進めており、授業参観と小学校の地域防災拠点運営訓練を同時開催して成果発表の場とし、子どもたちと保護者、そして地域が一体となった防災訓練を開催する予定です。

4 効果

商店街が場所と機会を提供し、民間企業のコンテンツや技術、広報力を活用して、消防署による防火・防災教育を子どもたちや地域に届ける。そこに、消防団や多文化共生ラウンジ等の多言語サポートを有機的に組み合わせることで、国籍を問わず、子どもたちから保護者までが楽しく学べる幅広い機会の提供が可能となりました。

その一翼を担っているのがマスコットキャラクター「てらちゃん」です。「てらちゃん」は野毛印刷社がデザインし、事業を効果的に推進する目的で生み出したものですが、いまや子どもたちや保護者に広く認知され、防災を楽しく身近に感じるアイコンとして、地域の活性化や地域防災力の向上に着実に結び付きつつあります。



防災てらこやのロゴと
マスコットキャラクター「てらちゃん」

5 今後

区内には、外国人のほか、高齢者などの要援護者、高リスクの住宅地等、まだまだ課題があります。今年度の夏休みは、都市整備局の提案で、まちがいさがしを通して防災まちづくりを学ぶ企画を行い、新たな防災の一面を子どもたちに紹介することができました。

「防災てらこや」の強みは、防災をテーマに様々な分野のエキスパートが参画できる点です。近年首都直下型地震の発生も懸念される中、横浜市民意識調査では災害対策への要望が12年連続で1位となっています。市民の関心がこれだけ高く継続しているのも、「誰も取り残されたり、取り残したりしたくない」との思いがあるからではないでしょうか。今後も多様な主体と連携してこれまでにない「楽しく学べる防災」を広げ、子どもたちが安心して暮らせる街づくりに貢献していきます。